Japan Geoscience Union Meeting 2013
(May 19-24 2013 at Makuhari, Chiba, Japan)
©2013. Japan Geoscience Union. All Rights Reserved.

HGG02-07 会場:202 時間:5 月 19 日 16:15-16:40

景観要素に対する文化的認識や象徴的イメージが自然性の印象に与える影響
Effect of cultural cognition and symbolic imagery of landscape elements on the impression of naturalness

水上 象吾 [1*]
Shogo Mizukami[1*]

[1] 佛教大学 社会学部公共政策学科
[1]Bukkyo University

環境の評価においては、人の視覚で捉えられる景観が有効な評価の一つであり、景観評価では、視野内に占める景観要素の物理量が評価にかかわる主要因であるとされ、様々な研究が蓄積されてきた。例えば、都市景観は人工的要素の占める割合が高く、逆に、水面、植生や山等の自然要素の見えの量は景観評価を高めるとされる。都市において自然要素の代表とされる緑に関しては、緑視率が指標とされ、心理的評価と関連づけられ環境や景観の評価に利用されてきた。

しかし、複数の要素によって構成される環境や景観の総合評価として印象が重視され、印象は、地域・環境や文化によって、受け取られ方が異なる場合もあると考えられる。

本研究では、緑、山並みや庭園といった自然要素を中心とした景観に関する印象を調べ、景観要素の状態の違いや象徴的意味合いが自然性の印象評価に与える影響について報告する。

人為的かかわり：植生を指標とした自然性の評価には、植生自然度や潜在性などさまざまな判断基準がある。種の種類や構成の違いが基準になり得るが、同種同体における状態の違いも視覚的に変化をもたらし、自然性の印象に影響を与えると考えられる。具体的には、緑という自然要素に手入れという人為的な整形が行われることで、視覚的な状態の変化を生み、人工的な性質を持ち得ると考えられる。緑の印象構造を調べたところ、量的な違い、多様性、整形性によって構成できることを明らかにした。また、整形性は手入れの度合いと強い相関関係を示し、自然性の印象へ強い影響力を示した。

文化や信仰の対象：都市の外部に位置する山並みの見えが、都市中心市街地において遠景の景観として捉えられても、視野内に占める面積の割合は小さい。しかしながら、山並みは自然景観の眺望として重要な意味をもち文化的にも認識されてきたため、景観評価において肯定的意味を持つ。山並みの見えの量を測定し、文献資料に表象されている山並みに関する言及内容から環境に対する印象を捉えた。その結果、山は古くから自然の象徴や信仰の場として、記号としての意味を持ち、山並みの見えは小さくとも人々に与える印象は強いことが示された。

象徴的イメージ：人々の景観に対する印象は、景観から得られる直接の知覚情報だけでなく、その対象に見立てられるイメージにより影響を受けると考えられる。枯山水庭園は、人為的に作られた空間内に大自然を象徴する造園技法であり、草木や水域を積極的に用いることなく、空間内には存在しない山や大海が表現され、スケールの異なる大自然を人為的な空間内に凝縮し表現している。ここでは、枯山水庭園を対象に、抽象化して表現された景観から、人々が主体的に想像することで認識される自然の印象を把握した。印象評価の結果、枯山水庭園はシンプルな構造の庭園にもかかわらず、多様で鮮やかな印象を受け、水のない環境であるが海や川等の水域が想像されるなどの結果がみられ、象徴される環境のイメージが印象へ影響することが示された。

同じ種類の景観要素であっても、状態の違いにより印象が変化する可能性があり、対象要素が持つ文化的な表象は、見えが小さくとも強い印象を与える場合がある。また、実際には目前に存在しないイメージの世界によって間接的に表現される景観が印象に影響を及ぼす可能性がある。

したがって、多様な構成要素を持つ景観に対して人々が抱く印象をどのように測定していくのかを検討する必要がある。また、国や地域の違いによって景観の文化的価値や意味づけが異なる中で、文化的認識や象徴的な意味をどのように共通項として把握していくかを検討する必要がある。

キーワード: 景観認知, 状態の違い, 象徴, 見立て, イメージ
Keywords: landscape perception, state variation, symbolic, analogy, imagery